

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## メルボルのShrine of Remembrance(戦争記念堂)について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅, 浩二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002300">https://doi.org/10.57529/00002300</a>

## メルボルンの Shrine of Remembrance (戦争記念堂) について

菅 浩 二

### はじめに

オーストラリア・メルボルン (Melbourne) 市の大通り Swanston Street は、ヤラ川 (Yarra River) に面する Flinders Street 駅の壮麗な駅舎の前から、St. Kilda Road と名を変えて更に南南東へ続く。ここから橋を越え更に1.3キロメートルほど進むと、王立植物園に隣接した小高い丘の上に、石造りの巨大な神殿風建造物がある。この建造物 The Shrine of Remembrance は、オーストラリアがこれまでに参加した戦争・武力紛争・平和維持活動などに、ここヴィクトリア州から従軍した者89,100名を記念するため、1934年に建立された公的な施設である (写真1)。

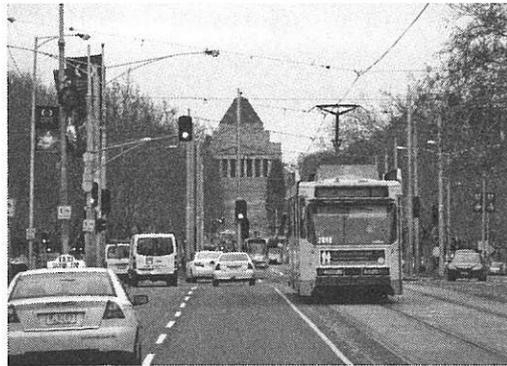


写真1：St Kilda RoadよりShrine of Remembranceを望む

この施設は日本語文献では、メルボルン観光案内書等でも「戦争記念館」「戦争慰霊館」「戦没者慰霊塔」などの名称で紹介されてある<sup>(1)</sup>が、近代国家と戦没者慰霊や戦争記念をめぐる学術的視点からの言及は、管見では見当たらない。そこで本稿は当施設を、国家・政治・戦争と宗教をめぐる筆者の学術的関心に基づいて簡単に紹介しようとする試みである。

もとより筆者は、2008 (平成20) 年と2010 (平成22) 年のいずれも8月に、この Shrine of Remembrance を数回ずつ訪ねる機会を持つたに過ぎない。しかし当施設については、この間2009年に、献堂式より75周年を記念して、このメルボルン地区に本部を構へるモナッシュ大学<sup>(2)</sup> 教授・Bruce Scates (歴

史学・オーストラリア研究) 執筆による詳細な解説書 *A Place to Remember: A History of the Shrine of Remembrance* が刊行されてをり、特に創建過程について当時の文献等に即して理解を進めることが可能となつた。以下本稿の記述は、同書や、2006年改訂の公式ガイドブック等の資料を参考としつつ(末尾の「主要参考文献等」一覧を参照) 進めるが、この施設の歴史・維持組織や、儀礼の本格的な考察等には未だ及んでゐないことを初めにお断りして置く。

オーストラリアにおける連邦全体の国立戦没者記念施設としては、1941年に首都キャンベラに設立された Australian War Memorial (AWM) がある。AWM は今日「戦争記念館」と日本語で訳されるやうに、単なる記念碑の機能に留まらず、戦争博物館、戦史研究・教育部門も備へてゐる<sup>(3)</sup>。またノーザンテリトリー準州(ダーウィン、1921年)、タスマニア州(ホバート、1925年)、西オーストラリア州(パース、1929年)、クイーンズランド州(ブリスベン、1930年)、南オーストラリア州(アデレード、1931年) ニューサウスウェールズ州(シドニー、1934年)の各州・準州も、それぞれを単位とする戦没者・従軍者記念施設を有してゐる(以上カッコ内は所在都市名と創建年)。1927年に連邦首都がキャンベラに移るまで暫定首都でもあつたメルボルンは、今日もシドニーに次ぐ国内第二の大都市であり、世界最南端の百万都市としての存在感をも示してゐる。このためこの Shrine of Remembrance にも、時にはヴィクトリア州の範囲を越えた政治的象徴性が託される場合もある<sup>(4)</sup>が、基本的にはこれらの州単位の施設の一事例に過ぎない。この Shrine と、AWM や他州の施設、或いは英国およびその文化圏の他の事例との比較等も、今後の課題である。

ところで上記の州単位の施設のうち、クイーンズランド州ブリスベンの施設もやはり Shrine of Remembrance の名称を持つてゐるが、ノーザンテリトリー準州ダーウィン、タスマニア州ホバート、西オーストラリア州パースの施設は、セノタフ cenotaph<sup>(5)</sup> 即ち記念碑の形状である。それらを踏まえて、現在、筆者がこのヴィクトリア州メルボルンの施設について注目したい点は、①この施設は「神社」の語の英訳と同様に shrine と呼称されてゐる。このことから、靖国神社や護国神社を Yasukuni Shrine や Gokoku Shrine と呼ぶ際

に、英語圏で喚起される印象を理解する一助となるのではないかと、といふこと ②本論で後述する通り「戦没者」のみならず従軍者全てを記念する複合的施設となつてゐること、の2つである。なほ、筆者の学術的関心は主に、世俗を標榜するナショナリズムや国家統合の疑似／類似宗教性にあり、近代国家と戦争記念施設をめぐる問題意識もこの点に關はるものである。本稿でも、この施設の歴史を跡付けること以上に、この点の類似宗教性を探る手掛かりに注意を向けてゐる。

## 1. Shrine of Remembranceの建立

メルボルンの Shrine of Remembrance の献堂式は1934年11月11日、会場に集ふ30万の参列者と、街路に並ぶ数万の群衆を前に執行された。午前11時、陸軍軍人でもあるグロスター公ヘンリー王子が、Shrine の中心部に鎮まる Rock of Remembrance に父・英国王ジョージ5世の名代として花輪を捧げた。そして奉祝のために、二万羽ともいはれる鳩が放たれた。翌日の The Age 紙は、この式典を「おそらくオーストラリア史上、最も明記すべきかつ深遠な共同儀礼の表現」だつたと伝えてゐる。

Shrine of Remembrance 創建のそもそもの計画自体は、この献堂式を遡ること16年前、1918年に始まる。この年の11月11日こそ所謂 Armistice Day、即ち「世界大戦停戦記念日」その日である。しかし戦争記念施設の必要性は、ヴィクトリア州において停戦前から広く認識されてをり、既に同年、この施設設立を目指す準備委員会が設立され、活動を開始してゐた。

1901年以降、英本国に対して、事実上独立した地位にあつたオーストラリアであつたが、周知の通り第一次世界大戦に際しては、ニュージーランドと共に志願兵による ANZAC (Australian and New Zealand Army Corps, オーストラリア・ニュージーランド軍団) を組織、連合軍の一員として英軍指揮下に置き、はるか地球の裏側の戦場に送りこんである。特に1915年の、連合軍とオスマン帝国軍とのトルコ・ガリポリ Gallipoli 半島をめぐる攻防は、約十ヵ月の時間と両軍併せて十万人の人命を費やし、更に多くの戦病死者・戦傷者を数へ

た激戦であつた。ANZACはこのガリポリで、4月25日の上陸作戦において初めて本格的な実戦に投入された。「ガリポリ」の地名と「4月25日」の日付は、植民地から出発したオーストラリア、ニュージーランド両国にとつて初の海外遠征の経験と相まつて、以後記憶され続けることとなる。4月25日は、早くも翌1916年にはANZAC Dayとして、行事を伴つて記念される日となつてゐた。そして第一次大戦停戦後は、このANZAC Day 4月25日と、Remembrance Day 11月11日の両日が、従軍者・戦没者を記念する日となり、今日に至つてゐるのである。ANZAC Dayは、1927年にはオーストラリアの全ての州で休日となつてゐる。

メルボルンの戦争記念施設も、元来このANZACの活動を顕彰するために企画されたものである。しかしそれがどのやうな物であるべきかについては、橋や病院などの実用的な施設が相応しいといふ声もあれば、純粹な記念碑的建造物を以て、単なる追悼のみならず将来にわたる記憶と示唆の場とすべし、との声もあつた。結局のところは、当時の準備委員会の議長代理で、自らも大戦中、オーストラリア第4旅団を率ゐてガリポリおよび多くの激戦地で活躍した英雄、陸軍中将ジョン・モナッシュ卿 (Sir John Monash) の意見もあり、恒久的に追悼と顕彰の場となる記念碑建造物を建てる方針が、1921年に、ヴィクトリア州各地から集まつた人びとによる集会の場で押し出されることとなつた<sup>(6)</sup>。

この時点では、この施設はNational War Memorial of Victoriaの仮称で呼ばれてゐる。翌1922年には、建設予定地についても20か所以上もの候補地より選定されると共に、施設のデザインについてもコンペティションの形で公募されてゐる。応募はオーストラリアおよび英国にとどまらず、アメリカ合衆国、ニュージーランド、トルコ、南アフリカやイタリアからも、計83件寄せられた。しかし結局1923年12月に選ばれたのは、メルボルンで建築事務所を営むフィリップ・B・ハドソン Philip B. Hudson とジェームズ・H・ウォードロップ James H. Wardrop によるデザイン “A Shrine of Remembrance” だつた。多くの応募者と同じく、ハドソンとウォードロップの二人も第一次大戦からの帰還兵であつた。

主設計者のハドソンは当初、セノタフやオベリスク obelisk 等の、当時一般的であつた記念碑型のデザインを考へたやうである。しかし彼はやがて思ひ至る。「持続的かつ満足のいくメモリアルは、内部構造なしには創り出され得ない。私は、この若い国にあつては世界大戦が国民的伝統を生み出したこと、そして内部こそが外部と同じ位、我等の想ひを精一杯吐き出すために必要であること、を感じた。…ここ、我らが孤高かつ威厳ある立地にあつて、我等のメモリアルは、内部と外部のデザインに結ばれたシンボリズムによつてのみ到達し得る「魂」を伴ふ、不朽かつ顕著なものであらねばならぬ」多くの20世紀初頭の建築家がさうであつたやうに、ハドソンも古代ギリシャの神殿建築様式に学ぼうと考へた。

実際に彼が範を採つたのは、ギリシャ建築の粹を費やし古代世界七不思議のひとつと数へられた、The Mausoleum at Hallicarnassus 「ハリカルナッソスのマウソロス霊廟」である。mausoleum といふ語の語源となつたこの霊廟は、小アジア西部に位置するアケメネス朝ペルシャの属領・カリアの王であつたマウソロスと妻アルテミシアの墓所として、その首都ハリカルナッソスに紀元前353年ごろ建立された。霊廟そのものは、その後千六百年以上存在してゐたが、度重なる地震や戦災により、15世紀初頭には土台のみを残すほどに朽ちてをり、その後も更に破壊されて、現在は全くの廢墟遺跡に過ぎない。しかし古代以来、驚嘆・讃仰と共にたびたび描写対象となつて来たこの霊廟は、実物が失はれて後も復元図において、建築家たちの関心を引き起こし続けてきた。基本としては、四角の墓所の周りをイオニア式円柱が取り囲み、その上をピラミッド型の屋根が覆ふ、といふ構造で、更にその全体が土台の上に載つてゐるもの、とされる。この時ハドソンが参照したのは、1877年にさるフランスの建築家により描かれた復元図だつた。

しかし、このマウソロス霊廟を模したデザイン案は、コンペティション終了後も賛否両論を巻き起こした。詳細は未確認だが、当時 St Kilda Road に「凱旋門」を建てたいとの声や、セノタフを中心とした ANZAC 広場の創建、等の意見も根強かつたやうだ。shrine については、このやうな施設なら造らない方が良い、との意見も出るなど、論争が数年続いた。実際に計画全体を

白紙に戻す方向にもあつたやうである。

しかし最終的には1927年、再びかの英雄・モナッシュ将軍の演説が、事態を決着させる。

“Every day in the year such a memorial would be a shrine for those who wished to remember the anniversary of the death of their kin.”

「一年中のどの日も、その記念施設は、縁者の命日を思ひ起こさんと欲する人びとにとつての霊廟とならう」<sup>(7)</sup>

モナッシュ卿がこの年のANZAC Day前夜餐で、このやうに霊廟デザインへの支持を表明したことにより、計画は創建に向けて大きく動き出し、同年のRemembrance Dayには定礎式が行はれた。翌1928年の試算では、この施設建設には当時の金で25万ポンドの巨額が必要であらうと見込まれ、浄財の寄付が呼び掛けられた。当時の不況にも関はず、州政府やメルボルン市の高官・名士から州内学校生徒に至るまでの幅広い寄付により、半年経つことなく設立の基金が集まつた。建築資材も可能な限りオーストラリア国内、できればヴィクトリア州内での確保が目指されるなど、このShrineを州民皆のもの、との思想を貫く努力がうかがへる。

ヴィクトリア州民共有の戦争の記憶、のための州民の公共財、といふ創建の際の基本思想は、今日も受け継がれてゐる。1978年にヴィクトリア州法として定められたThe Shrine of Remembrance Actに基づいて、現在この施設の維持運営は、州民の意思を代表してヴィクトリア州総督により任命される定員8名の管財理事Trusteesのもと、終身運営理事Life Governors、運営理事Governors、及び職員、ボランティア、警護員などを擁する組織で行はれてゐる。

以上、このShrine of Remembranceの基本的性格を知るために、その創建過程について極めて簡単に見てきた。続いては、建立以降今日に至るこのShrine発展史についての記述が求められよう。しかし、主に未だ調査が不十分であること、及び紙幅の関係から、以下では今日このShrine内に存在する

空間・諸施設について、筆者の問題意識であるナショナリズムの宗教性の観点に基づき重要と思はれるものを中心に紹介し、歴史的経緯についても必要があればこの中で記したい。

## 2. サンクチュアリ (内陣) および回廊

メルボルンの市街からこの Shrine を訪れる者は、北側から並木道を通り、巨大な前庭を歩いて石段に至り、途中の広場を抜け、また石段を上ることになる (写真2)。広大な石の前庭の端には



写真2 : Shrine of Remembrance 遠景 (Eureka Skydeck 88 階展望台より撮影)

LET ALL MEN KNOW—THAT THIS IS HOLY GROUND

(全ての人に知らせよ—この地の聖なることを)

そしてまた

WE WILL REMEMBER THEM

(我らは彼らを記憶に留めよう)

の言葉が金文字で刻まれてある (写真3)。

上に見たやうにこの施設は、その形状・儀礼或いは運営の全てに於いて、いかなる特定宗教・教派とも切り離された形態を志向して設立され、今日に至るまでそのやうな意味での公共空間として機能してある、と見なされてある<sup>(8)</sup>。

ただし他方で、多数多種の象徴を複合的に組み合わせられて構成されたこの施設と空間が、全体として「この地の聖なること」を、政治的意味を含めて主張してある事もまた、紛れもない事実である。実際、この Shrine は祭壇・礼拝

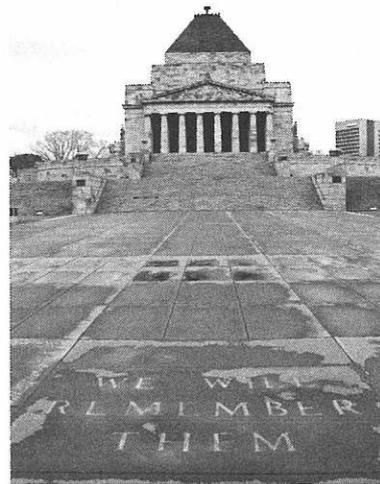


写真3 : Shrine と “WE WILL REMEMBER THEM” の金文字

堂、墓苑を具備してはゐない。しかし古代の霊廟を模したその構造の中に、「聖なる地」としての祭壇や拝殿、或いは「記憶」のための墓碑…等に相当する機能を有する施設や象徴が、類似宗教的に配置されてゐるのである。

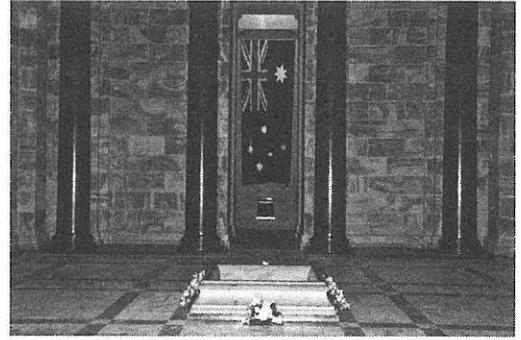


写真4：サンクチュアリと国旗

この「霊廟」の心臓部にあたるのが、設計者のハドソンが「魂」と呼んだ拝礼の空間、サンクチュアリ (Sanctuary内陣) である (写真4)。午前10時より午後5時までの開門中は常に、少なくとも1名の職員<sup>(9)</sup>が必ずこの場を離れない。ここでは厳粛な態度が求められてゐる。2010年8月15日の筆者の訪問の際には、わいわい騒ぎながら階段を昇つて来たオーストラリア人学校生徒たちも、このサンクチュアリに足を一步踏み入ると、途端に静粛になつてゐた。また、この空間に入つても脱帽しなかつた日本人と、大声で喋り続けてゐた中国人の観光客たちが、それぞれ職員から軽く注意を受けてゐた。

階段状の天井の下に、戦場で活動する人びとを彫りこんだ美しい12枚のパネルが、東西南北それぞれに3枚ずつ配されてゐる。その更に下の、イオニア式の黒御影石の柱16本に囲まれた空間が、サンクチュアリである。伝統的なギリシャ神殿にならつたやはり御影石製の床の中央には、これまた黒御影石の石盤 Stone of Remembrance が安置されてゐる。“GREATER LOVE HATH NO MAN” (「これ以上大きな愛はない」) といふヨハネ福音書15章13節の一部を刻んだこの Stone of Remembranceこそ、いはばこの Shrineの「御霊代」に相当するものである (写真5)。

周知の通りヨハネ福音書15章13節の全文は、日本語にすれば「人が友のために命を捨てること、これ以上大きな愛はない」である。この Stone of Remembrance は、遠く祖国を離れ海外に葬られた戦死者たちの犠牲を偲び、その今は亡き事を「不在の存

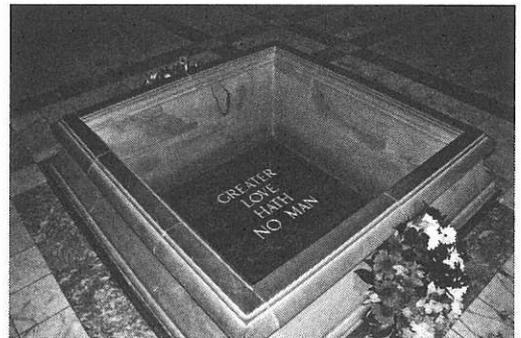


写真5：Stone of Remembrance

在」]として思ひ起こさせるよすがであり、その意味では、また墓碑の代替物でもあるだろう。1934年建立当時の公式ガイドブックはこのStoneについて「(ここへ) ヴィクトリア州民は、今後は、その悲嘆にくれる追憶を、とめどなく広がりゆく流れをなして持ち寄るだろう」と記してある。事実、それから75年以上を経た今日も、このStoneの前に捧げられる花輪は絶えることがない。

ところでこのStone of Remembranceに関はつては、非常に興味深い儀礼的意匠が、天井に施されてある。東側の屋根部分に小さな切れ込みがあり、ここより差し込む日の光が、毎年のRemembrance Dayの式典の核心となる時刻、州知事が花輪を捧げ拝礼する11月11日の午前11時前後に、この黒いStoneに差しかかるのである。日光はほぼ11分かけて、このStoneの西の端から東の端へと移動してゆくが、その途中で中央部の“LOVE”の文字を、正確に午前11時に照らし出す。かの有名な、イタリア・ローマのサンタマリア・デリ・アンジェリ聖堂 (Basilica di Santa Maria degli Angeli e dei Martiri) にある日時計にヒントを得た、といふこの仕掛は、創建工事開始後に計画に加へられたものである。当時の天文学者による144頁にわたる計算と考究により、この日光による“LOVE”の文字の照射は、以後少なくとも五千年間は、Remembrance Dayの午前11時、前後2分間以内の誤差に納まることが保証された。

ところが「永遠」を期したこの施設に、設備上の支障ではなく、当初想定してゐない別の問題が起きた。1971年にdaylight saving、いはゆる「夏時間」が設定されたため、日光の照射は正午に起きることとなつてしまつたのである。このため何と以後4年間は、州知事による拝礼時に、人工のビームを当てることとなつた。この事態を受け、創建当時にかの計算を為した学者も含めた再検討がなされた。そして二枚の鏡を天井部分に新たに配備することで、Remembrance Dayの儀礼時に、正確に自然光が差しかかる状態を取り戻したのである。

もつとも現在、Remembrance Day以外の日においては、開門中30分置きに人工の



写真6：Stoneに向け黙礼する訪問者たち

ビームが Stone を照らし、訪問者に敬礼を促すやうになつてゐる (写真6)。ビューグル (金管楽器の一種) の音に続いて、英国の詩人ローレンス・ビニヨン Laurence Binyon (1869-1943) が、第一次世界大戦戦没者に捧げた頌歌 The Ode 「戦死者のために」 FOR THE FALLEN の以下の一節 (第四節) が、サンクチュアリに響き渡る。この頌歌は、英本国の Remembrance Day 儀礼でも唱される、非常に有名なものである。

They shall grow not old, as we that are left grow old:

Age shall not weary them, nor the years condemn

At the going down of the sun and in the morning

We will remember them.

彼らは老いることがない 我ら残された者は老いていくにせよ

老醜が彼らにのしかかることも、歳月が彼らを圧することもない

そして夕べにまた朝に 陽の行くにつれ

我らは彼らを思ひ起こすだらう

このサンクチュアリを取り囲む回廊 Ambulatory の壁はオーストラリアとニュージーランドの国旗で覆はれ、ANZAC における両国の絆を表してゐる。その壁沿ひに、展示ケースが並んでゐる。納められてゐるのはビューグル 1 基、そして人びとの名前を綴つた書である。ビューグルは、1934年の献堂式の日にある軍曹により演奏されて以来、1974年の彼の死まで、ANZAC Day と Remembrance Day ごとに演奏されてゐたものである。そしてこれらの書であるが、これは「追憶の御書」the Royal Book of Remembrance および他40冊の「追憶の書」Books of Remembrance と呼ばれるものである。

「追憶の御書」には、献堂式の際のグロスター公の式辞と、創建時の国王ジョージ 5 世の

Let their names be for ever held in proud remembrance. George R.I.

彼らの名を、誇るべき追憶の内に永久に留めよ。

## 英国王及び大英帝国皇帝 (Rex Imperator) ジョージ

との献辞と署名、そして現国王エリザベス2世の署名が含まれてゐる(写真7)。そして8人の筆耕により丁寧に書き綴られた「追憶の書」には、アルファベット順に89,100名の、戦死者のみならず、ヴィクトリア州より従軍した人びと全ての名が連ね

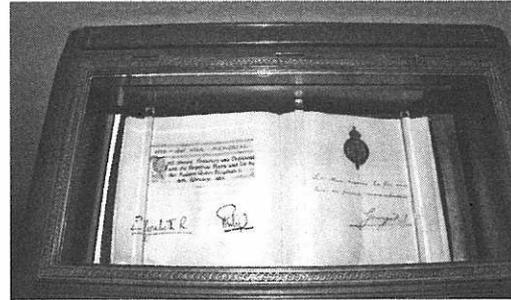


写真7：国王の署名

られてゐる。区別を避けて、階級、部隊、或いは戦死者か生還者かは、敢へて記されてゐない。紙の劣化のため、現在ではこれらの書に触れることは禁止されてゐるが、特定の人物の名前を見たいといふ希望があれば、職員の手で頁を繰ることができる。筆者が2010年8月17日に訪問した際には、メルボルンの南にあるフランクストン市から来た老夫妻が、第一次大戦に従軍した、妻の父の名を閲覧してゐた(写真8)。

回廊からは階段で、バルコニーに上がることができる。ピラミッド型の屋根の下のバルコニーは上下二層あるが、上層は通常閉鎖されてゐる。一般公開されてゐる下層バルコニーからは、メルボルン市街を望むことができ、その眺めは観光案内書のお勧めである(写真9)。回廊の西側



写真8：「追憶の書」を見る人々

から、バルコニーへ上がる階段の途中に青銅の板が掛けられてゐるが、これには英国の著名な詩人・作家ラドヤード・キプリング Rudyard Kipling が、特にこの Shrine of Remembrance の献堂式に寄せて詠んだ頌歌が掲げられてゐる。

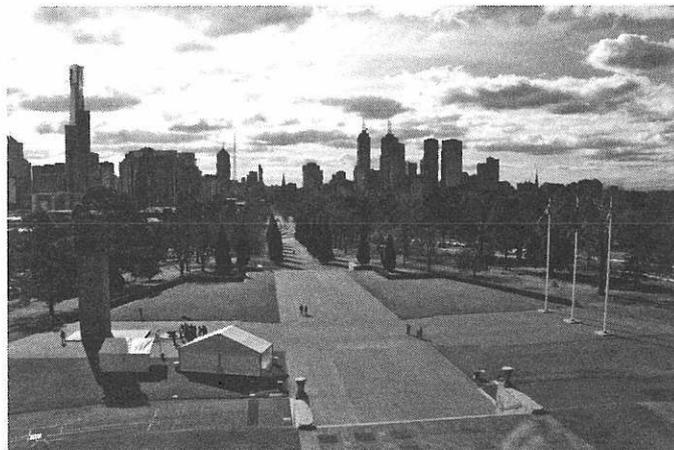


写真9：バルコニーからメルボルン市街を望む

### 3. 地下堂、柱の間および訪問者センター

サンクチュアリの丁度真下の部分に、「地下聖堂」の意を持つCryptの名で呼ばれる空間が存在してある（以下「地下堂」と記す）。この地下堂は、当初記録文書保管庫となる予定であり、今日も、連隊旗、記念額などが展示されてあるが、やはり全体として一個の象徴空間となつてある。

地下堂の中央には、オーストラリアの第二次大戦帰還兵で、戦争記念碑関係の作品も幾つか残してある、彫刻家レイモンド・エワーズ Raymond Ewers (1917~1998) の1968年の作品「父と息子の像」がある（写真10）。二人の軍装の男性が背中合はせに立つこの像の意味は、台座の部分に刻まれた以下の文章から読み取ることができる。

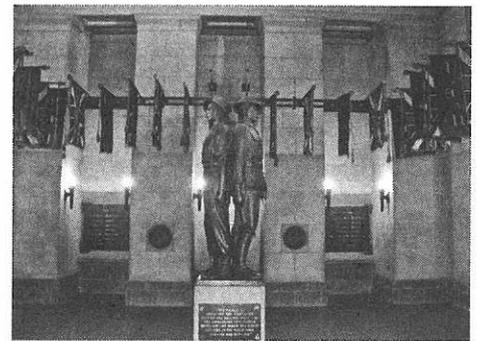


写真10：地下堂の「父と息子」の像

THESE FIGURE OF FATHER AND SON HONOUR THE COURAGE AND SACRIFICE WHICH LINK TWO GENERATIONS OF VICTORIAN SERVICE MEN AND WOMEN WHO SERVED AND DIED IN THE WORLD WARS 1914—1918 AND 1939—1945.

この父と息子の姿は、1914~1918年および1939~1945年の世界大戦に従軍し戦死した、二つの世代のヴィクトリアの軍人男女を結ぶ、その勇気と犠牲を讃へるものである。

この像は、二つの世界大戦を隔てる21年間をほぼ一世代分の年数と見立て、その両大戦に従軍した兵士たちを、「父と息子」の姿において見事に、視覚的に表現してある。そしてそれはこのShrineが、第一次大戦におけるANZACの活躍だけでなく、第二次大戦またそれ以降の戦ひについても記念する施設である事をも物語つてある。

以上の通りこのShrineは元来、地下堂、サンクチュアリ、そして二つのバルコニー、の4つの階層から構成されてある。2003年に至つて、堂宇に接す

る広場部分の下、即ち地下堂と同じ階層の北側に、展示室や売店などを含む「訪問者センター」が作られた。そして現在、この訪問者センターと地下堂を結ぶ空間となつてゐるのが、レンガ造りの Hall of Columns 「柱の間」である。即ち「訪問者センター」を抜けると、レンガの柱が並ぶ薄暗い空間のずつと奥の地下堂に、左右を向いた「父と息子」の像が見える、といふ空間構成である。また2005年11月には、柱の間に接して、学校生徒向けの視聴覚教育センターも開設された。

この「柱の間」はもともと倉庫だつたと思はれ、比較的狭く薄暗い空間で、展示品もあまり多くはないものの、展示主題は第二次世界大戦の対日戦にある。目を引くのは2005年2月に公開された、Changi Flag 「チャンギの旗」と名付けられた大きなユニオン・ジャックである。1941年にマラヤ・ジョホルのスルタンの宮殿に掲げられ、日本軍に奪はれる前に或るオーストラリア軍将校の手で降ろされたこの旗は、1942年、シンガポール陥落後にチャンギ捕虜収容所に持ち込まれ、収容者の葬儀の際にも用ゐられた。旗には、1945年までの収容生活中に書き込まれた百を越える署名が確認できるが、うち91件がオーストラリア人のもので、更にそのうち33件がヴィクトリア州人によるものである。旗の右隣では、豪日戦争の歴史、チャンギ収容所とこの旗の来歴、幾つかの署名者の説明、等を物語るビデオ映像が映写されてゐるほか、日本兵に敗戦を知らせる日本語のビラなども展示されてゐる。

他方で、新しい「訪問者センター」の空間は、かなり広く作られてゐる(写真11)。大きなスクリーンを持つ映写室では、この Shrine の紹介映像がくり返し上映されてゐる。展示室では、筆者が2008年8月に訪問した際には、この Shrine 創建に大きく寄与しながら、その完成を見ることなく世を去つた、上述のジョン・モナッシュ卿の生涯について展示されてゐた。また、2010年8月の訪問の際には、ヴェトナム戦争当時、南ヴェトナム軍を支援した軍事顧問団「オーストラリア陸軍ヴェトナム教導隊」(Australian Army Training



写真11：訪問者センター入口



写真12：AATTVについての企画展



写真13：ヴェトナム戦争に関する講演会

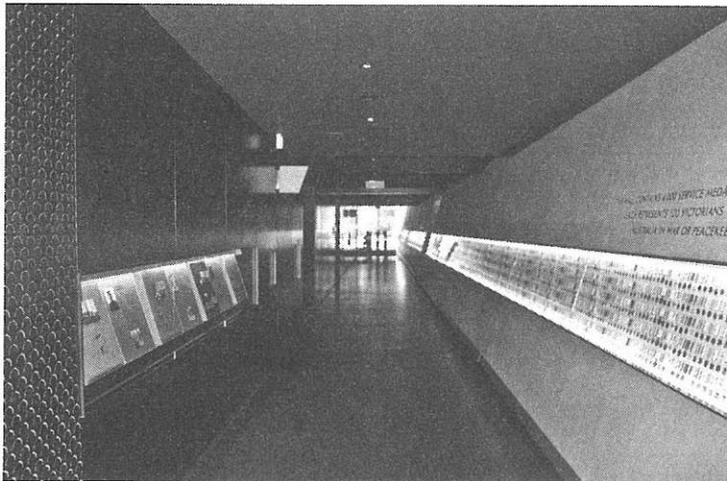


写真14：勲章レプリカの展示

Team Vietnam: AATTV) の活動が紹介されてゐた (写真12)。

特に2010年8月23日には、興味深い講演会に参加することができた。この日の正午より訪問者センター映写室で、もとAATTV所属将校、および、もと南ヴェトナム軍将校で戦後に難民としてオーストラリアへ移住した人物、の二人が講演、ヴェトナム戦争について彼らの観点から振り返つてゐた。50名ほどの観客は、うち半数以上が女子高校生の団体見学であつたが、皆熱心に耳を傾けてゐた (写真13)。「オーストラリアは共産ヴェトナムに敗れてゐない。南ヴェトナムが敗れたのだ」彼らの言葉をどのやうに受け取るにせよ、このような企画からは、この施設がオーストラリアにとつて戦争の「正義」化 (言ひかへれば敵の「悪魔」化) が比較的容易な両大戦を越えて、なほヴィクトリア州人の従軍記念の意味を追求してゐることが知られる。

訪問者センターの脇の部分の大きなケースには、四千個以上の勲章のレプリカが展示され、第一次大戦のANZAC以来これまでの、ヴィクトリア州民による従軍の規模の大きさを、視覚的に強調してゐる (写真14)。しかしこれ

ら勲章のレプリカの中でも最も古いものは、第一次大戦よりさかのぼる、第二次ボーア戦争(1899~1902)時のものである。英帝国の、南アフリカでの露骨な植民地介入戦であるこの戦争に、やはり植民地出自であるオーストラリアから従軍した者を記念することについて、いかなる議論があるのか又はないのか、は、今後更に調査してみたい。

### むすびにかへて

上述の訪問者センターの窓の外に、オーストラリア兵が従軍した戦地の樹木を植えた庭園が設けられてある。この庭園もまた、花輪を捧げる慰霊空間となつてある。また霊廟建築の内部および近接空間のみならず、周辺13ヘクタールがこの Shrine のいはば「境内地」として維持管理されてある。その中には、前庭に設置された国旗掲揚台、また12.5メートルの高さを持つセノタフとその前にある「永遠の炎」から構成された「第二次世界大戦メモリアル」など、注目すべき象徴施設・記念碑・意匠などが、多数ちりばめられてある(写真15・16)。現段階では未だ調査の及ばぬところもあり、これら周辺を含めたこの戦争記念、慰霊追悼の空間としてのこの Shrine of Remembrance 全体像については、稿を改め、考察を含めて論じたい。

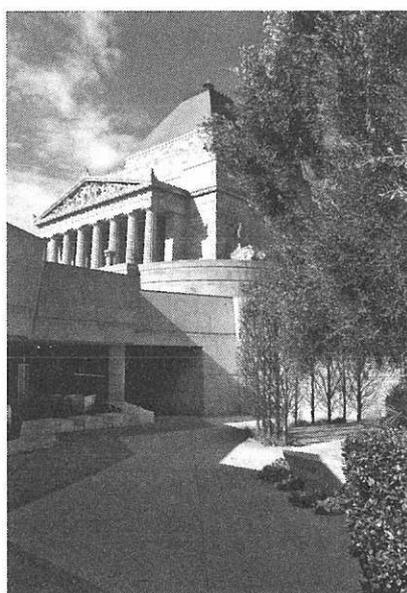


写真15：戦地の樹木を配した庭園



写真16：Shrine前庭。  
右側が第二次大戦メモリアル。

筆者の関心であるナショナリズムの宗教性の観点からは、このメルボルンの施設の詳細な描写もさることながら、本稿でも触れたやうに、首都キャンベラの戦争記念館などオーストラリア国内の他の施設との比較や、旧大英帝国規模での幅広い視座に立つ考察が不可欠であらう。特に、その政治文化の源流としての、英本国の戦争記念施設を含めた調査も必要である。そしてさうした政治文化のあり方は、20世紀初めの20年間、英国の同盟国であつた日本にとつても無関係ではないだらう。国家或いは「帝国」と戦争の記念、慰霊と追悼といふ問題意識を常に確認しながら、今後もこの方面の研究を進めたい。

## 註

- (1) 本稿表題の通り、筆者は「戦争記念堂」といふ日本語名を提案したい。その理由は本稿に示す通り、この施設が碑や塔ではなく廟堂の形状を持ち、「無宗教」式であり墓地の機能も持たないながら霊廟に近い機能を有してゐることによる。
- (2) モナッシュ大学 Monash University は、1958年設立のヴィクトリア州立の大学である。その校名は、本稿でも言及してゐる第一次大戦期のオーストラリア陸軍軍人 John Monash (1865-1931) に由来してゐる。
- (3) AWMの戦史研究部門は1997年より、日本政府の援助を受け、豪日戦争関連の資料データベース構築事業を行つてゐた。同データベースは既に完成してをり、関連研究成果も含めてその成果をウェブ上で閲覧できる。  
<http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/>
- (4) 一例として、2010年11月7日には、K・ラッド外相(元首相)ほかオーストラリア閣僚・軍幹部の案内により、米国のヒラリー・クリントン国務長官、R・ゲーツ国防長官がこの施設を表敬訪問してゐる。
- (5) ギリシャ語で「空の墓」を意味する cenotaph は、通例「慰霊碑」と訳される。
- (6) モナッシュの肖像は現在、100ドル紙幣に描かれてゐる。
- (7) 2003年にオーストラリア政府の退役軍人省は、設立準備から今日までのこの施設の歴史を写真で振り返る書籍、*Every day in the year - The Shrine of Remembrance* を刊行してゐる(「主要参考文献等」参照)。モナッシュのこ

の言葉は、この本の題名にその一部が使はれると共に、裏表紙に記されてゐる。

- (8) 無論この施設に、オーストラリア社会一般におけるヨーロッパの文化的影響に即して(教派不特定の次元で)キリスト教の影響を看取することは可能である。この点について近年、先住民政策史や植民史の見直し等により、オーストラリア社会で強調されてゐる多文化主義の視点からはどのやうに解釈され得るのか。「市民宗教」等の語をキーワードとしながら今後更に調査したい。
- (9) 2010年8月17日に筆者の質問に応じた男性職員は、数年前に国防省を停年退官した、と言つてゐた。彼によると、もと軍人など、様々な志願者がここで働いてゐる。また Shrine の警護はヴィクトリア州警察が担当してゐる。儀礼の際には、警備担当の警察官は第一次世界大戦時のオーストラリア陸軍軽騎兵の制服を着用する。

#### 【写真について】

\* 撮影者はいずれも筆者。

\* これら全ての写真について、Shrine of Remembrance 事務局より掲載の了解を得てゐる。

\* 撮影日は以下の通り。

写真10・16：2008年8月10日

写真1・3：2008年8月11日

写真2：2010年8月14日

写真11：2010年8月15日

写真5・6・8・9：2010年8月17日

写真4・7・12・13・14・15：2010年8月23日

#### 【主要参考文献等】

\* 本稿の Shrine of Remembrance 創建史および各部の説明の出典・参照箇所は、ほぼ全て以下二種の資料の該当部分解説に限定されてゐる。このため煩を避けて、具体的頁数等を記してゐない。今後、他施設との比較等を含めた本格的な考察を行ふ際には、具体的箇所を明示することとする。

Scates, Bruce, *A Place to Remember: A History of the Shrine of Remembrance*, Cambridge University Press, Cambridge, 2009.

Shrine of Remembrance, *SHRINE OF REMEMBRANCE MELBOURNE*:

*Honouring service and sacrifice*, Shrine of Remembrance, Melbourne, revised 2006.

\* 他の参考文献および参考 website 等は以下の通りである。

Commonwealth of Australia, *Every day in the year— The Shrine of Remembrance*, the Department of Veterans' Affairs, Canberra, 2003

Catherine Moriarty, "The RETURNED Soldier's bug": making the Shrine of Remembrance', in N Saunders and P Cornish, *Contested Objects: Material Memories of the First World War*, Routledge, London, 2009

The Shrine of Remembrance website

<http://www.shrine.org.au/> (最終アクセス2010年12月10日)